

心の発見 神理編 1971年 三宝出版

高橋 信次 (たかはし しんじ)

幼少の頃から靈的体験を重ねるとともに、電子工学、物理、天文、医学などを学ぶ。コンピュータ機器の製作事業を営む。

宇宙空間に体積と質量を有するものを、物質と名付けている。私達の目にとまる一切のものは、物質の姿である。物質をさらに大別すれば無機、有機と分類されて行くが、生物の体は有機質の細胞集団によって成立している。その細胞集団によって構成されている生物は万象万物の相互関係において安定し、第3次元の世界に適合して存在している。

細胞集団によって構成されているこうした肉体を考えたとき、この物質の支配者は何かと考え、それがあると思い至らざるをえない。物質とエネルギーの共存不二の姿が物質的に実証されている以上、私達の五体の成立もそれが物質の全てだということは否定できない。同時に肉体の支配者である意識、すなわち魂の存在についても、物質、エネルギーとは異なった次元の存在として認識せざるをえない。なぜなら肉体物質が絶対とした場合、私達は睡眠中に記憶機能が働かないことを誰も否定することはできない。私達の脳細胞は、従って万能の記憶装置ではなく、五体、五官の通信、受信、指令の機関であるということであり意識、魂こそこれらの機能を操作する、肉体の支配者であり永遠不变の本当の自己である。意識が肉体を支配し、その意志にもとづいて肉体は操作されるという事実を誰も否定することはできない。この意識の中心を「心」と呼ぶ。心は、想念意志の発信所である。この意志によって、物理的な肉体行為は現われる。悲しいとき、嬉しいとき、胸にこみ上げてくるものこそ心の実体である。

肉体的労働によって疲労する現象は、肉体エネルギーの消費によるものであるが、心的なエネルギーも精神的な苦悩によって消費され、肉体的な病的原因にまでつながって行く。

心的疲労はその苦悩を調和することによって回復するが、根本的解決がなされない限り、いつか苦しみは持病のように芽生えてくる。

こうした苦しみの原因は、大宇宙の支配者である神仏の意志に反することから人間自身が作り出して行くものなのである。

神仏の意志こそ神理であり、人間の心の中には、誰も過去世で学んだ記憶が記録されている。それは自分自身に対して絶対に嘘をつけない事実である。他人に嘘をいうのは、自己保存、自我我欲を通す場合のみであるのだ。

私達の心には、常に善と惡が同居しており、利己的な己の中の惡に打ち克つ生活が、私達の人生における修行の一つといえるのである。

私達の心は、本能、感情、智性、理性という区域に分かれ、その想念によって意志という働きの区域に連絡されている。またその内部には、次元の異なっているあの世とこの現象界を転生輪廻し続けてきた、過去の想念、本能、感情、智性、理性、意志の先天的善惡の業もまた受けつがれて在る。さらに、この現象界で作り出した、己の後天

的業も自身の心の姿として同居しているのである。

この“心”が、神理に適した生活をすることによって、自分自身の平和な安らぎにつながって行く。球体のように、そうした心の中の区域が調和された状態の人を、円満な人格者といい、こうした人の意志は常に柔軟である。

心はだから無限大に広い人もいるし、特定の思想などによって自ら心の枠を作っている、小さな心の人もいる。物質経済の奴隸と化してしまっている心の持主もいれば、逆に足ることを悟って、物質文明を支配している心の人もいる。

キリスト教の神理も、釈迦の神理も、永い歴史の経過の中で、過去の弟子達や学者、現在の関係者の智性、感情、意志など、誤った“心”によって歪曲され、宗派の乱立を見るような結果になっているという現象も従って出てくるのである。

神理を失ってしまった宗教は、もはや人の心を救うことはできない。

神理は一つであり、今も昔も変わることがないことを悟るべきである。

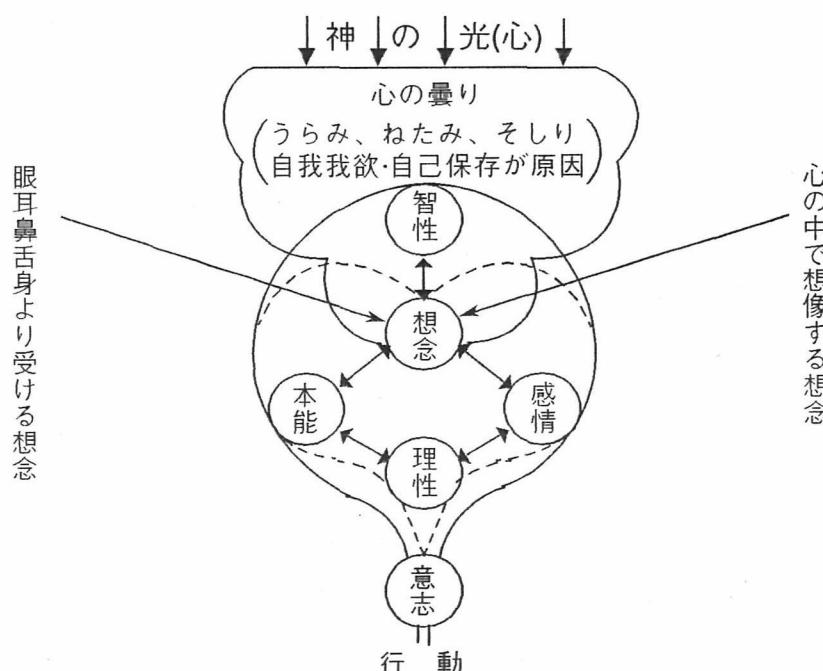
この現象界は、肉体舟に乗っての修行場であるため、善と悪とが混じり合っているが、次元の異なった意識の世界は、善と悪との区域が分離していて、個々の心の調和度によって段階が定まっている。こうしたきびしい場へ、私達の心は、現世における調和度がそのまま通じてしまうのである。すなわち、人生航路の苦楽は、私達の心が作り出しているもの、と悟らなくてはならない理由がここにあるのだ。

本能がむき出しになれば、感情と作用して、理性と智性で歪んでしまう。

感情だけが強すぎても心の調和はくずれる。

自己保存の感情や、うねぼれの高い智性、自己保存の本能は心の曇りを作り、神仏の安らぎの光を受けることはできないということである。理性の作用による、反省という想念と行為が、心の曇りをとり去るであろう。心の調和を計ることのできるものこそ、イエス・キリストの教えに適う者であり、釈迦の八正道すなわち中道の精神に通じる者なのだ。

万物に対する感謝の念、それが報恩という行為によって実現されたときに、人類同士の心からの調和が成り立つ、ということなのである。



不調和な原因とは

私達の不調和な原因を追求してみると、ほとんど自分の欲望が満たされないために起きていることが解る。

人より偉くなりたい、良い着物を着たい、うまい物を食べたい、環境一切の整った家に住みたい、子供を有名校へ入れたい、数え上げればきりがない欲望の泥沼。足ることを悟っているならば心に自制が生まれてくるのだが、逆へ行く人々が非常に多いのである。その結果、それらは欲望の奴隸になって安らぎの生活を得ることができなくなるのだ。

自分の立身出世のためなら、同じ仲間に対しても平気で不義理をする。上司に認められたいために己の心を偽り、下僕のような封建社会さながらの態度をとる。

地位や名誉や金が、人生を豊かにするものであろうか。我欲が出れば、平穏な生活はおろか、己を亡ぼす場合もある。人間は、偽りのない生活の中にこそ正しい心の芽が出て足ることを知り、安らぎの人生を送ることができるのである。虚栄や欲望におぼれてはならないのである。このように、貴い修行場としての人生を、無意味にすごしてはならない。与えられた環境の中で、勤勉に努力して生きて行けば、心の不安も消え、安らぎの環境を作り出して行けるのである。

反省

反省とは、自分になした想念と行為について振り返り、そのときの考え方、なしたことについて、神理に適っているかいないかを心の中で自問自答してみることであり、その誤りの原因を正し、より良く魂を浄化して行くことが、正しい反省の仕方である。

反省はあくまでも、自分自身を中道におき、第三者の立場に立って、己をあらゆる角度から見ることが必要である。自己保存、我欲の修正をするための修行がその一つであり、自分が慢心していないか、をみつめ直すことも反省の一つである。

こうしたら、相手はどのように考えるか。自分が相手の立場だったらどうするか。相手に対する同情の結果、慈悲魔になっていないか、どうか、というふうに、反省について挙げればきりがない。反省の材料は、無限に近く存在しているのである。自分の心に偽りがないか。悪い考え方、悪い行為については、二度とくりかえさないように自分自身の心にきびしく、他人には寛容の心で、生活することが大切である。

八正道

(1) 正見(しょうけん)

ものを正しく見る、これが必要である。多くの人々は、この問題について、その人の行為や外見だけで判断する場合が多い。これは誤りである。現象を見るときもそうだ。外見だけでものごとを判断することは避けなくてはいけない。

眼は、人生航路の乗り舟の附属品と考えねばならない。客観的に見た現象や印象については、正しい心の眼で判断することが肝要である。

ものごとの原因と結果について、さらに第三者として、己を中道において考察することも必要なことである。また相手の心になって考えることも必要である。

(2) 正語(しょうご)

語るということは、言魂となって、相手に伝わるということである。表現された私達の言葉は、相手の耳を通して不調和か調和か、いずれかの現象を生じさせるものである。

すぎたお世辞や、横暴な語り方は人の心を傷つける。その原因是、結果となって自分にはねかえってくる、言葉は、少なすぎても多すぎても、自分の意志を正しく人に伝えることはできない。

良く自分の心に問い合わせ、自分が相手の心になって語り合うことが必要である。強い言葉は、相手の心に不調和を呼ぶものである。

(3) 正思(しょうし)

思うということは、考えるということである。見る、聞く、語る、という行為に対しても、まず正しい中道の神理をもとにして、考えなくてはならない。自己本位の考え方では、身を亡ぼす結果を生じるからである。神理である大調和の法則に反するからである。

思うことは、行為につながる。心の動作である。だから不調和な思考は、想念のフィルムに抵抗を造ってしまい、その抵抗は、自分の意識や脳細胞までも狂わしてしまう場合がある。

私達は毎日の生活の中で、自分だけ良く思われようとする心を動かしたり、樂をしようと思い他人のことを考えなかつたりする。しかし、真実でない考え方ではすべて自己保存の我欲につながって行くことを知るべきである。

自己主張は、自己にもどる。競争相手を蹴落とすなどという思いは、あの山彦に似て、己にかえってくるものだ。「馬鹿野郎」といえば、山彦もまた「馬鹿野郎」と自分の声が帰って来るようなものである。家庭内でも姑と嫁の争いを良く耳にするが、姑が嫁に対してきびしいことをいうと、嫁は度重なる叱言に、心から嫌な姑だ、早く死んでしまえば良いと思うようになってくる。そうなってくると心の黒い想念は現象化され、たとえ口でうまいことをいっても姑の心にひびくものではない。それは心から思っての行為ではないからである。その原因是互いに自分の子ではない自分の親ではない、という自己保存の思いがこのような結果を引き起こすのである。

互いに、神理に適った正しい考え方を正しく語り合うことによって誠意をつくすことである。解決はそこにある。

決して人に対して恨んだり、妬んだり、そしつたりするような考え方を持ってはならない。通じない人々に対しては「哀れな人だ、どうか神よ、救ってやってください。あの人に安らぎを与えてください」と祈ってやる心が必要である。心から正しく思うことは、さらに自分に安らぎを生み、神仏の愛に満ちた光を受けることができるという、これは神理である。

(4) 正業(しょうぎょう)

生活のための仕事に対して、不平不満の心が存在することは、すでに感謝の心を失っているからである。もちろん正しい努力の結果に対しては、報酬の基準が、生活経済との調和の上に成り立つべきである。生活環境における基準の調和が崩れている場合は、己の心と良く相談し、生活できる経済の確立を、計らなくてはならない。自己保存のみによる物質経済の独占は、必ず心の不調和を起こし、これが原因となり他の生活環境にも不調和な結果を作り上げてしまうことになるのである。あくまでも大衆の調和を根底にした正しい仕事に専念することが、本当の修行である。己の仕事についても、社会の人々に貢献できる目的を持った、正しい仕事を私達は修行の目的としても行なわなければならない。

(5) 正命(しょうみょう)

私達の肉体は、人生航路を渡る舟であり、この舟の支配者は意識すなわち魂である。この魂は、神仏の子としての本性であり、私達は神の体の中にいるのである。この現象界において、永い転生輪廻の中で造り出してきた業の想念は、私達の意識の中に記録されている。それを、神の子としての正しい想念によって調和することが修行なのである。

業想念とは、私達が常に心の中に想像している不調和な自己保存、自我我欲の姿であり、過去世においても持ち続けていたものである。それは、行為につながって行くもので、自身が反省することによって見いだすことのできる欠点である。また調和もできるものなのである。

人間は、眼耳鼻舌身意の六根によって惑わされる。過去世の悪い業の種も、そうした悪いから起きた。心は私達の肉体を支配している意識の中心で、自己には絶対に忠実であり、嘘をつくことはできない。ところが人間は、他人には都合が悪いと嘘をつく。こうした自己保存によって、より大きい業を造り上げてしまうのである。

(6) 正進(しょうしん)

私達の人生は、肉体を持って80年か90年であり、肉体の舟に乗ってしまうと表面意識が10%、潜在意識が90%という比率で、ほとんど目先のことしか分からぬために、自分自身が悟る修行の場としては非常に良い環境である。

この現象界は、人々の心の中が分からぬいため互いに誤りを犯すのであり、一寸先は闇というようなことをいうのである。しかし、人間生活はだから有意義といえる。心の精進を日夜にし、より高い次元の世界に魂を磨いていくことができる所以である。

また逆に目先のことが分からぬから、苦惱の原因を自ら作り出し、悪いことも堂々とするようになる。人生は暗闇だ、などという考え方になってしまふ。人生は、正しい生活をしていれば、決して暗闇ではない。

人々の心を重んじ、我欲にもとづいた考えを正して、自身の言動を、第三者のつもりで注意深く見守りながら生活することが、正しい生活というのである。こうした生活の中から、私達の潜在意識に包まれている無限大の智恵が解き明かされ、人間として生活をしている喜びを悟ることができるのである。

(7) 正念(しょうねん)

私達は心の中で念ずることが即現象化されるのであり、たとえば自分が欲望を果たそうと念ずる心はすでに欲望のとりことなる、という想念になり、自分の意識に記憶されてしまい、その記録を修正することはできない。

私達が、歩んできた過去を消すことができないように、私達の想念は、すべて記録し保存されることを忘れてはならない。しかし不調和な念も、反省することによって、私達の心は進化するのであるから、反省のない人々は哀れである。反省は、神仏が人類に対するために与えた慈悲なのである。

私達の想像は無限大である。しかしその想像も正しい調和のための想像でないと、正念とはいえない。間違った念によって己を失う場合があることを知るべきである。

(8) 正定(しょうじょう)

私達が、神仏の子としての自覚ができるることにより、毎日の生活自体変わってくるはずである。この世は修行所である以上、やがては帰らなくてはならない世界が存在しているのである。私達は煩惱という海の中でも悟ることはできる。心の調和を計り、反省の瞑想は、己の靈域(オーラー)を造り出し、己の心の神性、仮性が潜在意識の扉を開き、不滅の世界、あの世の生活をも思い出すことができるのである。正しい神理の実践生活の中で定に入ることにより、私達は体が宇宙大に拡大され、神仏の意識と調和され、心の安らぎを味わうことができるるのである。